

葉月

〔はづき〕令和5年8月

「月見草」「観月」「桂月」とも言われ、古くから月に生えていると信じられていた桂の葉の月という意味があります。

発行：北海道神社庁一区教化委員会

天照大神も只、正直のみぞ御心とし給へる。
殊更に此国は神国なれば、神道に違ひては
一日も日月を戴くまじき謂なり

神皇正統記

今月のことば

天照大神も只、正直のみぞ御心とし給へる。
殊更に此国は神国なれば、神道に違ひては
一日も日月を戴くまじき謂なり

神皇正統記

北畠親房は南北朝争乱の世にあって、南朝が正当であるという主張を掲げて一步も引かなかった。特に吉野から山越えに伊勢の神宮に詣で、神宮では松村家行に付いて神道の奥義を受け、我が国が神国なる所以と、神道とは天照大神の道であり、大神の御心は正直の道を守る以外にないことを悟った。親房はその足で伊勢から船に乗って常陸に入り、関、小田、大宝の城に寄った最中、小田城で神皇正統記を撰述した。その中には天照大神の道がその基礎におかれているが、その直接の理由は右によって明らかである。

ここに引いた正統記の一節は右の信念を率直に述べたもので、親房が正統記の冒頭で「大日本は神国なり」と言い切った態度、「日神長く統を伝へ給ふ」此故に神国と云ふなり」とした毅然たる態度が、ここに反映されている。

(神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋)

季節のまつり

八朔 田の実りの節供

八朔とは八月朔日の略で、旧暦の八月一日です。この頃、早稲の穂が実るので、農家の間で初穂を恩人などに贈る風習が古くからありました。このことから、「田の実りの節供」とも言われ、この「たのみ」を「頼み」にかけて、武家や公家の間でも、日頃お世話になっている(頼み合っている)人、その恩を感謝する意味で贈り物をするようになりました。

盆踊 盆に戻った祖霊への供養

お盆の時期になると全国の至る所で盆踊りが行われます。もともとは、年に一度、文字通りお盆のときに、この世に戻ってきた祖霊を供養するために踊ることを意味します。

櫓を中心にして、その周りを踊る

「盆踊り」は、古代日本で神様が降りてきたところを中心に、輪を作って踊ったなごりと言われていますが、鎌倉時代、時宗の開祖・一遍上人が広めた念仏踊りのように列を組んで歩きながら踊る「行列踊り」などもあります。その代表的なもの「阿波踊り」です。



盆踊り歌とは？

ふるさとの盆踊り歌には、その土地に長い間歌い継がれたものが多くあります。その歌は、本来は盆を迎えた祖霊を慰め、またこれを送るためであったと考えられますが、今はその趣旨は精霊踊りや念仏踊りの歌にしか残っていません。多くは庶民の娯楽化した歌詞や、口説きの類で、踊る者と歌う者との交歓のためのものになっています。

歌舞は、元々鎮魂のための作法でした。盆踊りの輪踊りの形は櫓を中心して、今までの、神楽や巫女舞の輪踊する所作と同じようなものといつてよいと思います。盆踊りの人たちが恍惚となっていく態が示されています。

今の盆踊りは拡声器やテープの音量を上げて歌いますが、昔は野良や山で鍛えた野太い、よく透る声で歌われたと思います。その肉声こそが、ふるさとの『祭り広場』たる盆踊りの踊り手らの胸に沁み透ったに違いありません。

積厚流光

厚大がも 積功績に 恩恵が及ぶ 先祖だけのこと。 積重なら、それだけ恩恵が及ぶ。 積厚なら、それだけ恩恵が及ぶ。



くじく草 孔雀

参考文献 『くらしと祭り百話』小野迪夫(神社新報社)

令和 5 年
2023 年

8 月

日	月	火	水	木	金	土
		1 友引 八朔 う	2 先負 たつ	3 仏滅 み	4 大安 一粒万倍日 三りんぼう うま	5 赤口 ひつじ
6 先勝 さる	7 友引 一粒万倍日 とり	8 先負 立秋 いぬ	9 仏滅 三りんぼう い	10 大安 一粒万倍日 ね	11 赤口 ● 山の日 うし	12 先勝 とら
13 友引 う	14 先負 たつ	15 仏滅 み	16 先勝 うま	17 友引 ひつじ	18 先負 さる	19 仏滅 とり
20 大安 いぬ	21 赤口 三りんぼう い	22 先勝 一粒万倍日 ね	23 友引 処暑 うし	24 先負 とら	25 仏滅 う	26 大安 たつ
27 赤口 み	28 先勝 うま	29 友引 ひつじ	30 先負 さる	31 仏滅 とり		

二十四節気

【立秋 りっしゅう】… 八日

旧暦七月申の月の正節で、この日から暦の上では秋に入りますが、実際には残暑が厳しく、まだまだ暑い最中です。しかし朝夕は何とはなしに秋の気配が感じられます。

【処暑 しよじよ】… 二十三日

旧暦七月申の月の中旬で、涼風が吹きわたる初秋のころで、暑さもあさまり、収穫の候も目前となります。

六曜・選日

〔六曜〕

【先勝】… 諸事急ぐことによし、午後よりわるし

【友引】… 朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む

【先負】… 諸事静かなることによし、午後大吉

【仏滅】… 万事凶、思えば長びくおそれあり

【大安】… 何事をするのにも吉の日、大吉日

【赤口】… 諸事油断すべからず、正午のみ吉

〔選日の吉凶〕

【三りんぼう】… 三隣亡日、普請始め、棟上大吉日

【一粒万倍日】… 出資・投資・購入、新規事業開始

婚姻は吉、借りの、離別は凶

七十二候《8月》

処暑

初候・綿村開（わたのはなしへむらう）
綿の実を包む花の蕾（むら）が開き始める
次候・天地始肅（てんちはじめてせむし）
よつやく書さが弱まりはじめ
末候・禾乃登（こくものすなわちみののぼる）
日に日に稲穂の先が重くなる

立秋

初候・涼風至（すずかぜいたる）
秋の涼しい風が変わる
次候・寒蟬鳴（ひんせいな）
夏の終りを告げる蝉の鳴き声
末候・蒙霧升降（むかききりまじり）
深い霧がたちこめる

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つづつに細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

「暑中見舞い」

贈答の習慣が簡略化

暑中見舞いはもともとお盆の贈答の習慣が簡略化されたものです。かつては、お盆に里帰りする際、祖先の霊に捧げるための物品を持参する習慣がありました。それが、しだいにお世話になった人全般への贈答の習慣になっていきました。

その際、本来は直接訪問して届けるのが一般的でしたが、やがて簡略化され、手紙ですませるようになったのが、現在の暑中見舞いです。

暑中見舞いは、二十四節気の小暑（七月七日）から立秋（八月七日）にかけて送るのが通例で、立秋を過ぎたら「残暑見舞い」とします。

ちなみに、お盆の贈答の習慣は、お中元へと受け継がれています。

安産祈願 8月の戌の日

8日（火）

20日（日）

*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕しております。神社にお問い合わせください。

《 11日 山の日 》

山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する日です。



祝祭日には国旗を掲げましょう